

# 幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

’97年 5月号



## 手づくり保育シリーズ

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈る新シリーズ。不得手先生でも子どもたちといっしょに楽しみながらつくれるのがチャームポイント。

### ⑧つくってあそぼう！ ダンボール



どこにでもあるさまざまなダンボールを使って遊んでみよう。  
一人で遊べる小さなおもちゃ作りから、仲間でいっしょに遊べる  
乗り物や家など大型の製作まで紹介。切り方や貼り方などダン  
ボール製作の基本書。

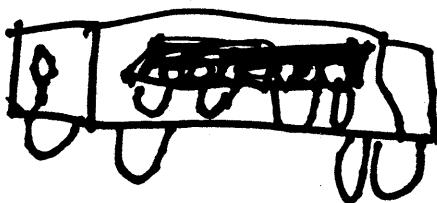
ねもと いさむ・著

B5判・96頁・定価：本体2,200円+税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼児の教育

第96卷 第5号



# 幼児の教育

第九十六卷 第五号

目 次

© 1997  
日本幼稚園協会

ある日…… (4)

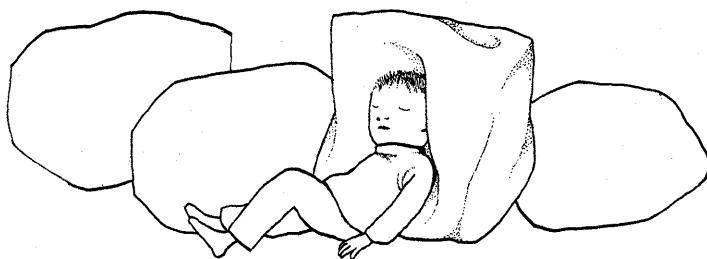
「児童の世紀」を振り返る——その一…… 本田 和子…… (6)

震災後の子どもたち(16) 自然・氣づき…… 浅野みよし…… (12)

子ども時代と私(6) 手作りのぬくもり…… 千羽喜代子…… (19)

大きくなつた子どもといきあう…… 津守 真…… (24)

ある日の育児日記から(7) 佐藤 和代…… (31)



特集へ慣れる

焦らずゆづくらと…… 内村真奈美… (32)

一年生が慣れるまで 橋本由美子 (36)

憤れる”その前に…… 森兼千枝子 41

情熱大陸 第二季 第11話  
二年間を振り返る

## 在外子女の異文化対応の諸相

—異文化間を往還する者のストラテジー——  
渋谷 真樹・(54)

吉岡 晶子… (60)

表紙絵／小田原千佳子

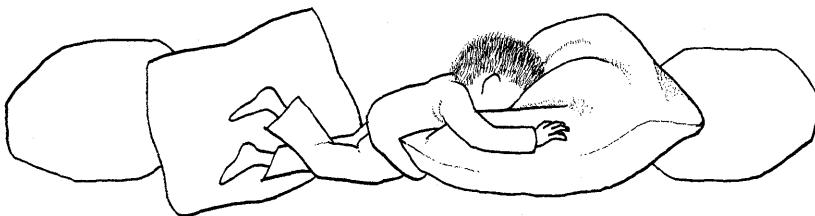
扉題字／津守 真

扉カツト／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ちよつとカゼ気味」

編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里

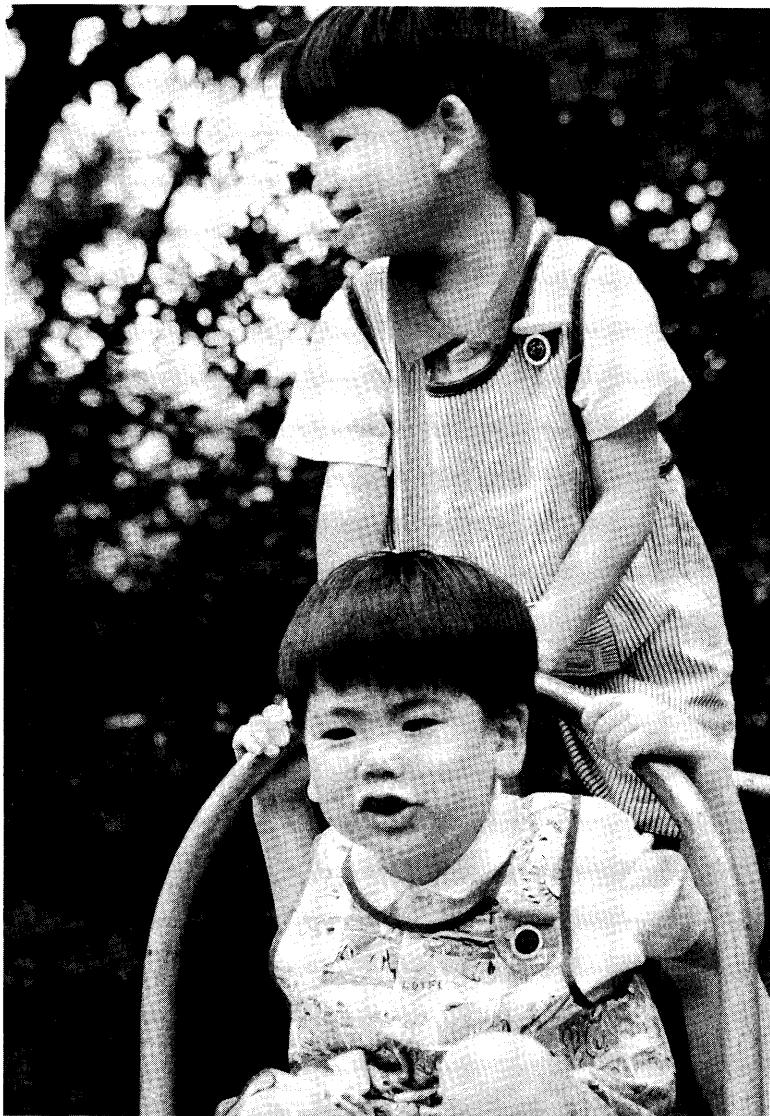
編集部／仲 明子





ある日

撮影・平野 清



# 「児童の世紀」を振り返る

——その一——

本田 和子



## 幕を開ける前に

「二〇世紀は女性と児童の世紀である」。こんな  
キヤッチフレーズのもと華々しく幕を開けた今世紀  
も、後、僅かで幕を下ろそうとしている。「児童の世  
紀」と呼び慣らされたこの一〇〇年の時間のなかで、

私たちは、「子ども」に関して何を成し遂げ、また、  
何を失つたのであろうか。このあたりで、今世紀を振  
り返り、私たちの生きたこの時代と子どもとのかかわ  
りを考えてみると無駄ではないだろう。

「児童の世紀」というこのアトラクティブな言葉は、  
周知のように、スウェーデンの女流思想家エレン・ケ

イの同名の書に由来している。同書の発刊は、一九〇〇年、直ちに独・仏・英の各國語に訳されて西欧諸国への進出を果たし、わが國の場合も、一九〇六年に独語版からの訳出がなされた。

しかし、同書が、果たしてどれだけ多くの人々に読まれ、また、その思想がどの程度に理解されたかは定かではない。しかし、「今世紀は、子どもの世紀となるべきである」と謳い上げられた彼女の主張は、論旨・論の展開・そしてそれにかかる諸経緯など、とりあえずは捨象されたまま国境を越えて広く世界中に広がり、児童中心主義的諸運動の指針とされてきたことは確かであろう。

「児童の世紀」という言葉と、それによって喚起されるイメージと概念に対し、私たちの世紀は、極めて柔軟かつスマーズであり、子どもを中心位置させることにいささかの抵抗も示さず、むしろ、欣然とそれを受け入れたのであった。もしかしたら、児童中心の

時代を迎えるべく、何らかの合意が形成されていたとでも言うのだろうか。今世紀の幕を開ける前に時間在过去へと遡って、こうした土壤形成に無縁とは思われぬ知的動向のあれこれに、目を向けてみようとするのはこの所以である。

### 「子どもの発見」と「進化の発見」

近代的な意味での「子ども」の発見を、農業への依存から脱して工業化社会へと転換し始めた、十七、八世紀の西欧社会に見るのは、最近の歴史学の定説であろう。そして、わが國の場合も、わが國流の特殊性を認めた上で、江戸時代中期に新しい「子ども観」の蠢動を見ることは、おおよそ妥当であろうとされている。この時代に、北半球的文化の発達した地域では、「子ども」は「小さい大人」であることを止め、「子ども期」という特別な時間のなかに囲い込まれ始めたのである。

「子ども期」という囲われた時間の出現は、同時的に、「学校」という囲われた空間を発生させる。「保護」と「教育」の対象として特別の生活を用意された始めた子どもたちは、そのための、大人一般とは異なる時空間を必要とする存在へと変貌を余儀なくされたのであった。「学校」とは、大人と子どもの分離の進行した時代に、子どもたちを保護隔離し、一定のモデルに従つた大人へと成長させるための社会的装置に他ならない。極言の誇りを恐れずに言うなら、一種の「ゲットー」とも言うべき「囲い込み」の装置…。ただし、その囲い込みは、新しい社会成員の形成のためには最も効率的・効果的な仕組みであったから、時代の心性は、先ずはそれを肯定し、子どものための不可避の営みとして受け入れたのであろう。

しかし、発足した「学校」は、果たして子どもたちに相応しい生活を保証し得ていたであろうか。一八世纪後半から、一九世紀前半にかけて、ルソー、ペスター

ロッチ、フレーベルなど、新教育論者の出現が目立つが、労働や遊び、自然な生活など、彼等が主張したのは、いずれも現行の学校教育の外に子どもを解放する提言であった。「子ども」という存在を「保護」と「教育」の対象と化させた近代は、しかし、早々にその在り方に疑問を抱き、それを巡つて種々の模索を開始したとも言い得よう。

時代のまなざしの前に、「子ども」は、特別の意味を付与されて浮上してきたが、しかし、彼等の遭遇に關しては、様々に疑念が呈され始め、いまだ、社会的合意が形成されていない、というのが実情だつたらしい。そんな状況下に、社会全体を振り動かして、衝撃的なデビューを果たしたのが、「進化論」である。それは、来るべき時代に相應しく、「自然科学」の



学説という衣裳をまとっていたが、単なる学説であることを越えて、新しい「世界観」として、すべての人々に、まなざしの更新を要請した。何しろ、万物は神の被造物ではないかも知れないと言うのだから。人間は、神に似せて造られたのではなく、もちろんの生物の進化の果てにあり、自然淘汰・適者生存を繰り返しつつ現存する。人々に訪れた新しい思想は、こう語つて、人と世界を神の絶対から解放するのに手を貸そうとしたのだった。

いま存在している当代の人間にまして、自然淘汰と適者生存の所産たる次代の人々はより進化した状態で出現する。したがつて、人間という存在は、過去から未来へと進歩の相を呈し、より優れた社会を招き寄せるることは必定である。というわけで、「進化」と「進歩」が結託し、さらには「進化・進歩＝価値」とする樂天的未来観が胚胎される。それが、世紀末の閉塞状態にあつた人々のなかで、新しい希望へと転化させら

れたであろうことは想像に難くない。このとき、進化論は、自然科学分野における新仮説であることを越えて、広く大衆性を獲得し、通俗的世界観として時代の心性を支配した。

「進化論」というより「進化的社會思想」が、「子ども観・教育観」と手を結ぶのに何ほどの時間も必要とはしない。何しろ、次代の人間に一層の進化が期待されるとすれば、子どもは大人にまして価値を持つ。それに、適者生存というかたちで生存競争の原理が付託されると、子どもの養育に従来以上の意義が付託されることも自明である。「進化＝価値」という結合は、「子ども＝価値」という結合を促す。以後、発見された「子ども」は、單に大人との異質性において注目されることはではなく、大人に勝るその価値において顕在化されることになる。十九世紀の終わりに、人々の世界觀をゆさぶった科学思想は、思わぬ波及効果を「子ども—大人關係」の上にもたらしたのであった。

## エレン・ケイの「子ども論」と

### 「進化論的優生学」

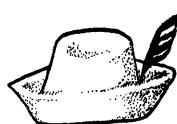
児童中心主義の基盤をダーウィンの進化論に見るとは、いささか奇異に過ぎるとの誇りを免れ得ないかも知れない。しかし、今世紀を「児童の世紀」と謳い上げたエレン・ケイ自身が、進化論、なかでも遺伝学説に傾倒し、それに依拠しつつ人種改良を企てたことは周知であろう。彼女の「児童中心思想」においては、人種改良の所産として生まれ出る筈の優良人種によってのみ未来は信じるに値するものとなるのだから。

そのゆえにこそ、来るべき世紀は「児童の世紀」と

ならねばならない。遺伝的に劣性を帯びた子どもを世に送り出さないこと、いわゆる「優生学」の普及・徹底が先ず二〇世紀の第一義的な営みであり、さらに、よい生殖行為の所産として出現した優れた種を健全に育成すべく、養育者としての「母性保護」が課題となる。彼女が華々しく謳い上げ、そのゆえに、いささか

ならずロマンティックな響きとともに世界を席巻した「婦人と児童の世紀」とは、自然科学的新学説、すなわち進化論と遺伝学説に導かれた、かなりの程度に合理主義的、かつ、ドライなものだった。しかし、ブレーカーやキーツなど、ロマン派の詩人たちに主導された一八世紀の「児童中心思想」とは異なり、この合理主義のなかにこそ、いかにも科学の時代たる二〇世紀への相応しさを見るべきであろう。

彼女に大きな影響を与えたとされる遺伝学者ゴールトンは、ダーウィンの従兄弟、メンデルらに代表されるような生物学的遺伝研究の分野を人間に拡充し、統計的手法による「遺伝的天才」の研究を試みて、後に優生学を提倡した。天才の家系からは多くの天才が輩出し、よい遺伝子の組み合わせがよい子孫を生み出



す。こうした新説が、生物学の世界から社会学の分野へと進出してきたとき、若き婦人運動家エレン・ケイが、それに共鳴し熱い賛同と支持を表明したとしても不思議ではない。彼女は、卓抜した読書家であったとされるが、いまだ無名のイップセンを愛読・評価し、ス

ペンサー、ミル、ルソー、あるいはニーチェなどの著作に親しんでいたと言われる。そんなとき、書斎に飛び込んできたのが、当代の世を騒がしつつある新説、進化論とゴールトンの研究成果だったのである。

遺伝研究の所産として、科学の名においてなされたメッセージに、彼女の若い魂は魅了された。『児童の世紀』のなかに次のような主張がある。「わたしは人間性は改変し得ると信ずる。尤も、わたしの言うこの改変は、全人類がキリスト教信者になつたからとて到達されるものではなく、ただ、全人類がほんとうに目ざめて、子どもを産むことの神聖であることを自覚する時をまつてはじめて到達されるのである。この自覚

がほんとうに成り立てば、子供及びその発生、その処置、その教育に関する事柄が、社会的中心的な仕事となり、すべての道徳、すべての法律、すべての社会施設が、それらの事柄の周囲に集まって来るであろう」。

ロマン派の詩人とは異なり、エレン・ケイの心を占めたのは、現存する子どもの無垢な美しさや汚れなさではなく、「生殖」という行為の神聖さであった。私どもは、ここで、彼女の嘗みにおいて、子どもと女性と恋愛・結婚の三つが併存し、等価的に位置づけられていることの意味を理解することが出来る。そして、『児童の世紀』『恋愛と結婚』『婦人運動』の三部が、エレン・ケイを代表する著作とされていいるのもこの所以であろう。

(聖学院大学)

# 震災後の子どもたち(16)

## 自然・気づき

浅野みよこ

「自然・気づき」、これが私の働く保育園での九六年度の保育テーマである。地震の後、「自然との調和」についてこんなテーマを掲げるようになつた。これまで「作る」「木」「土」等の順にテーマを進めてきたが、丁度「土」をテーマに選んだ時、そのしめくくりのように起こったのがあの大地震だつた。今から思えばどこか

予感しながらテーマを進めていたような気がする。日々失われゆく自然の姿を目にしながら、このままではだめになるという思いにいつも駆られていた。

地震が起きた時、私はガタガタ揺れ動く家の中に立ちすくみながら、とうとう来てしまつたという思いでいっぱいだった。そして震災の惨

状をまのあたりにした時、もう引き返せない、本当に目を醒まさなければと自分に言いきかせていました。私一人ぐらいという甘えた気持ちが地球環境をだめにしてきた。沢山の犠牲者の姿に涙しながら私は改めて自分の生き方を問い直しました。

私の家も保育園も大した被害はなかったが、地震の日を境に私の心は急転回を始めた。まず物への執着心がなくなつた。形ある物全て壊れる。地震のあと残った物は巨大なゴミの山だった。私は家を整理しながらどんどん物を捨てた。一番多かったのは本だ。愛読した本を捨てながら何と私は観念の世界を生きていたものだと思った。私が一番捨てなければいけなかつたのは、観念に縛られた不自由な心だとこの時気づいた。物をどう見るかは心次第なのだ。私はある日奇妙な体験をした。はき古した靴下をゴ

ミ箱に捨てようとした時、悲しむような気がそのまま下から伝わってきたのだ。こんな物にも心があると、思わず手をとめてしまった。結局その靴下は大きな穴があくまではぐ事となつたが、物にも命がある事を感じ、物に執着しないとは物を粗末にする事とは違うのだと知った。人が心をこめて作った物には命が宿り、人が愛情をこめて大切に扱つた物からは暖かい心が伝わってくる。そんな暖かい物で私たちの身の回りを作り直す事ができたら、私たちの社会は自然と調和するものに変わっていくのではないだ



カット・浅野みよこ

ろうか。

今まで見えなかつた物が見えるようになる  
と、今度は自分の心が見えてしごまかせなく  
なってきた。ごまかすと私の心は痛みを訴え  
る。地震後しばらく、この心の動きに頭と体が  
ついていかず何ともアンバランスな状態が続い  
た。一番きびしかつたのは夫との関係だ。これ  
まで家庭の平和のためにと問題を感じてもふれ  
ないようにしてきたが、それが出来なくなつ  
た。ごまかせないのでから日々やり合う事にな  
る。痛い問題にふれると彼は怒り、ギクシャク  
した関係がしばらく続いた。

夫婦の関係だけでなく、親との関係、職場で  
の人間関係など全てやり直さなければならな  
かつた。そんな私を見て私の母は「あんたのよ  
うな考え方は特殊や」と言つた。少し落着いた  
今から見ると、見苦しくもがいていたものだと

思うが、それまでの間人間関係は本物ではなかつ  
たのだ。それをやり直すのは大へんなエネルギー  
がいるが、そこを乗り越えた時、心はひと  
回り大きくなり樂になる事が分かつた。

大工だった夫は、震災復興のボランティアの  
仕事で、壊れた家の修繕をするようになつた。  
私の実家も彼に直してもらつた。地震後すっか  
り元気をなくし、崩れた壁も目にとまらなかつ  
た母も、日が立つにつれ地震の怖さもうすれ、  
あそこもこちももつときれいにと段々欲を出す  
ようになつた。何をせい沢な事を、神戸の被災  
地に行つてみたらいと、夫は母のあれこれの  
要求に苛立つた。母とやり合い夫をなだめなが  
らどうにか修繕は終わつた。

「家を建て直すだけではだめやねえ。住む人の  
心も立て直さないと」と私たちは話し合つてい  
る。壊れた家は立て直す事が出来ても、人の心

を建て直すのは何とも難しい。私たちの大きな大きな課題である。

地震後のもう一つの変化は、二人ぐらしの我が家に、日本語学校に通う中国人女性が同居するようになった事だ。震災で住居を失った彼女は一年間我が家でくらす事になった。見も知らぬ外国人と一緒に生活するようになって、私の「家」に対する考え方はずつと変わった。まずプライバシーなるものがなくなった。私の物を彼女は使い、彼女の物を私は使い、生活を共有した。彼女の前でも私たち夫婦はやり合い、いつだったか彼がものすごく怒って彼女がびっくりした事がある。私たち内緒事はなく何でもオープン。あるがままの姿で出会える場としての「家」をと私は考えている。

ありのままの状態で彼女を受け入れたので彼女も又、ありのままの自分を出してきた。彼女



も中国にいる夫との関係に悩んでいた。「あなたは幸せ?」と彼女は私によくきいてきた。「日本人は幸せ。中国人、問題いっぱい。悩みいっぱい」とよくぐちをこぼした。日本に来て改めて自分の国を見直すと、今まで見えなかつた問題が見えてきて余計苦しむ事になる。日本で様々な物を見て、彼女の考え方は変わり、中國にいる夫との間に益々ギャップができてしまつた。「なぜ私が見も知らぬ日本人の家に世話になれるのか、中国の人に説明しても理解してもらえない」と言う。「だってそれは地震のためと説明できるでしょ」と私が言つても彼女



は首を振る。中国と日本の社会の違いを彼女は説明した。便利で物の豊かな日本にもう少しでも見たくばかりを見ていた。でもそれは私も同じだ。まず自分の足もとから、まず夫婦の関係から世の中の幸せを築いていかなければ。

言つて私たちを心配させた。

昨年の四月彼女は帰国した。その年の秋、私たち夫婦は招かれて四川省成都の彼女の家庭を訪れた。再会を喜ぶ彼女の隣に、私たちの訪問を喜ぶ彼女の夫の姿があつた。彼女の夫はとてもやさしい人だった。「最初は日本にいる彼女が理解できず、寂しくつらかった。でも彼女を理解しようと努力し、日本の事も段々分かつてきた」と彼は自分の気持ちを私に訴えた。彼は私たちが夫婦で来た事をとても喜び、毎日私たちの為に料理を作ってくれた。私の夫は彼のそんなけなげな姿に心打たれたのか、日本に帰つたかった。帰国寸前まで中国に帰りたくないと言つて私たちを心配させた。

都江堰という二千年以上も前の巨大な水利施設の跡を案内された事だ。ゆつたりと流れる大河の中に古代の人の偉大な事業の跡が残つていた。はてしない時間の流れと広大な自然の姿にのみ込まれそうになりながら、私は大きな仕事を成しとげた人々の姿を思い浮かべた。人間は決して小さい訳ではない。問題は心なのだ。心をどこにもつていくかで何を成しとげるかが決まってくるのだ。広い大きな心をもたなければ。私たちは沢山のおみやげと沢山の学びをもつて日本に帰ってきた。地震がなければ彼女

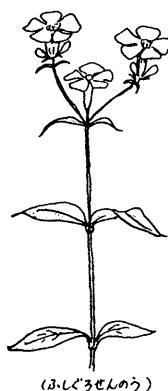
と出会う事もなかつただろう。地震はつらかつたが、おかげで私は沢山の事に気づかせてもらつた。

この原稿を書いているのは一月十六日。明日は震災記念日だ。今ラジオのニュースではロシアのタンカーの重油流出事故の話が流れている。油まみれの水鳥の話は悲しい。でも私たちは前を向いて生きていかなければいけない。こんな時代に子どもたちをどう育てていったらいのだろう。

地震の後保育園では「自然との調和」をテーマにうたい、運動会では地震を表現あそびとして再現した。地震の場面で涙を流す親もいた。今まで「自然・気づき」をテーマに、足もとの野草の命に目を向けている。今まで気づかなかつた足もとに目をやると沢山の野草の花が咲いている。子どもたちは毎日新しい野草を見つ

け、押し花にしたり観察画をかいたり植物図鑑で調べたりした。こんな小さな花にも誰が名づけたのか一つ一つ名前があり、人間の命を助けたのだ。ケガに効く野草、下痢に効く野草、ガンに効く野草……どれも人間の食べ物にもなる。知らなかつた。一つ一つが新しい発見であり改めて自然の力の偉大きさと恵の深さを教えられる。

子どもたちは野草の花を絵にかきながら、自分たちが図鑑で調べた事を字にしながら、いつのまにか集中力と根気を身につけ、物を見る力





を身につけていく。野草たちのおかげである。  
「野草ってな、人間たちにふまれたりしてかわ  
いそう。でもな、根っこから栄養とか吸って、  
がんばっている」と子どもたちは言う。よくそ  
こに気づいたね。私は素直に子どもの心に感動  
する。出来上がった部厚い野草図鑑を一枚一枚  
めぐりながら、私はそこに子どもたちの心の跡  
を見る。ああ、野草から、自然から色々な事を  
学んだんだなあと思う。それは頭で得た知識で  
はない。心で自分の体を通して得た知識であ  
り、きっと子どもたちの心の奥深くにしまい込  
まれるに違いない。それが子どもたちの心の土  
壤となりそこからきっといつか、新しい花の芽  
が育つにちがいない。そう信じて私は子どもた  
ちを見ている。

地震から二年が過ぎた。様々な記憶は日々薄  
れしていくが私の心はもう以前に後戻り出来な

い。目の前にある一つ一つの物が常に私に問  
いかけてくる。お前は本当に気づいているのか、  
何によって人間は生かされているのか。一人の  
人間を生かす為にどれほどの物を自然は用意し  
ているか。身の回りをよく見てごらん。あの震  
災のあともそうだった。ひび割れた畠の中から  
菜っぱが芽を出していた。その芽がその時何と  
光って見えた事か。私は何と自然の恵みに感謝  
した事だろう。私は自分が生かされている事に  
感謝しながら、今もう一度生き直している。

(善法寺保育園)

## 手作りのぬりえ

千羽喜代子

今、手許に北九州市門司区の地図を置いている。小

倉の友人に依頼して郵送していただいたものである。

門司は昭和六年から十六年（小学校四年生）まで生活

した処であるが、私が生活した頃に比べると現在は大

変な変りようである。無理もない、半世紀以上経過し

ているのであるから。関門国道トンネルの開通に帰因  
していることも否めない。私が生活していた頃の門司

は現在の旧門司にあたる。

昭和十六年頃までの私の記憶に残っている門司市を  
まず紹介しよう。

対岸は下関である。和布利神社（現、関門トンネル  
入道口）の対岸の壇之浦は、泳いでも渡れるくらいの  
短距離にあって（もっとも潮の流れが速いので泳いで  
渡るのは容易ではない）、人の往来が肉眼で見えた。



海洋性気候の地であり、タイやフグをはじめとして新鮮な魚貝類が豊富で、朝の魚市場の熱氣は子ども心にも躍動をおぼえた。目の前でフグを料理する包丁のさばきに、しばし見とれたこともあった。

当時の門司港は、釜山との連絡船や大連にむけての航路、石炭船などが寄航し、何と活気に満ちていたことか。中でも子ども心に興味をいだいたのは威勢のよいバナナのたたき売り、店に高く盛られた赤ちゃんの頭ほどの大きさのザボン、特にバナナのたたき売りの前で、これまた釘づけになつたものであつた。しかし残念ながらバナナは当時の私の口には入らなかつた。入つてもせいぜい半分か三分の一であつた。子どもは病気にかかるという理由で。

昭和十二年頃から戦時色がちらつき（日中戦争勃発）、門司を中継場所にしていたのであろう、各家庭に二、三人ずつの兵隊が何日か滞在し、家庭料理の接待に母や祖母たちが汗を流し、子どもたちもお国の方

めに手伝つたのであつた。子どもとの遊びの上手な人もいた。

以上、どのような生活背景のもとで子ども時代を過ごしたか、その一端を紹介したのであるが、幼稚園時代は肋膜炎を患い、家庭内での生活をよぎなくされた反動からか、小学校（当時は尋常小学校）に入学してからは勉強したという記憶よりも、放課後は専ら屋内・屋外を問わず、近隣の子どもたちとの遊びで一日が暮れた。家の周囲は住宅街で広場という広場はなく、坂の多い処（一坂町）であったが、カクレンボ、石けり、ゴム跳びなどをしていると、不思議にどこからと



もなく子どもたちが寄つてきた。

小学校の生活は、朝礼時に校長先生が白い手袋をはめて、奉安殿から恭々しく出してこられた教育勅語の挙読から始まるのであるが、習慣化されていた。最大の楽しみは放課後の学校の裏山である。タイコ橋の下の急斜面は格好のスベリ台で、お尻をつきながらクラスマイトの数人とスリルを楽しむ。どうやつたら手をつかないで滑れるか、何回も操り返す。すでに他の子どもたちの遊び場になつていて土がツルツルで、光っている。椿の花が咲く頃、その実の落ちる頃、野イチゴが適する頃、ジュジュ玉のできる頃など、森の何處に、いつ頃、何があるかを熟知していて、それらをお手玉の豆の中に加えたり、首輪を作つたり、密を舐めたり、勲章にしたりなど、お互に教え合い、教わり合う。下校の合図で蜘蛛の子を散らすように家路につく。

休日は専ら徒步で、家族たちと、友だちも一緒に、

また時には近所の大人たちとも一緒に、和布利公園方面、田野浦方面、また丸山を通り、その先のトンネルを通つて貴布方面に遠足に行く。山から流れ出る清水をすくい、イナゴを追い、カキを海水で洗つて口に入れるなど、郊外の自然環境で遊ぶ。このように想いおこしている今現在、ふと気付いたことは、両親は私の体力づくりを願つての郊外活動ではなかつたかということである。小学校三年生頃の写真を見ると、上肢・下肢ともに細く、しかも色黒であるところから、まさにゴボウのような身体つきであった。そのためクラスにほぼ一人の給食補給者の中に入っていた。この頃、虚弱児だけを別室に集めて給食の補給をしており、その対象児に該当していたのである。

今頃になつて知る親の恩である。書棚に置かれていた『母心(友松圓締著)』がなつかしい。

昭和十六年秋、父親の転勤で上京、当時は郊外であつた西武新宿線の沿線に住んだが、小学校六年生の

夏期休暇を利用して、一週間にわたって有志のみのキャンプを同じ沿線の久米川で行つた。当時の久米川

は武蔵野の雑木林の連なる豊かな自然環境で、そこでテント生活である。引率者は六年生の担任に男性の先生が何人か加わつてゐたが、現今学校教育では考えられない計画である。テントの張り方がまずかったため夜中の雨で床まで雨水が侵入するというアクシデント。三十九五十人くらいの六年生の男女児が五六人ずつのグループに別れての無言劇の上演（もちろん男女別々）、いかに自然環境を上手に利用するかと智慧を出し合つた。一週間であつても、はじめて親から離れて共同生活をした体験は、この頃の子どもたちにとって修学旅行以上の喜びであり、また慰めでもあつた。三度の食事は自炊であったと思うが、それほど負担に感じなかつたのか、記憶していない。写真も写していない。

このキャンプは、待望の修学旅行が中止になつてしまつたことによる恩師たちの思いやりであつたらし

い。

遊びということで思い出るのは、人形づくりとそれを使っての人形遊びである。親に書物や文房具を求めても玩具を買い求めた記憶が薄い。そろそろ節約の時代に入つていたのであろう。遊びに使用する道具の多くは手作りであった。お手玉は布で三通りの型を作り、採つてきたジュジュ玉などを加えて縫い上げた袋につめる。それを学校の休み時間を持ちうけて取り出し、友だちと自己目標を定めて競い合う。同様に、着せ換え人形の洋服や着物を、縫い物をしている母親の側で作る。一時は布で人形を作つたこともあつた。友だちのおばあさんに笑われても、それは自分の作った宝物であるから立派なものである。紙の着せ換えよりも布で作った着せ換えの方が本物に近い。着物はオクミまでついている、本物のミニ版であつた。

母親がことさらに女の子としての教育を意図してい

たとは思えないが、我が子の要求を受け入れていたのであろう。母親から叱られた記憶はない、おだやかな人であった。

作った人形や衣服は早速に人形ごっこに使用した。

空き箱を幾つもかかえて、翌日は友だちの家に移動する。弟妹の世話の依頼に自責の念をおぼえながらも、童話の中のお姫様を登場させ、童話の世界を人形ごっこの中で再現することもあった。自分がその主人公になつたつもりになつて。

昭和十六年頃、地域に「子ども会」が誕生した。発起人は近所の青年（男性）であったと思うが、風呂屋（地方版）に掲載された。子どもの地域社会教育活動の始まりであつたとも聞く。

私の児童期は、太平洋戦争勃発以前の決して物の豊かな時代ではなかつたが、平凡な生活の中での親とのふれあいや環境の中に“ぬくもり”という情感がたゞよつており、それが生活にうるおいを与えていた。引き続戦争・空襲・疎開・終戦という、かつてない激動の中で思春期・青年期を送るのである。



（大妻女子大学）

を集会場にして第一回の発会式がもたれた。子ども会が誕生した経緯はわからないが、その後、地域の道路の掃除などに参加した。竹ひごとローソクの炎で模型飛行機を作り、飛ばないので苦労したこともあるた。

この子ども会がどのように発展したかは、その後上京してしまつたので定かでないが、発足時の写真が新聞



# 大きくなつた子どもとつきあう

津守 真

子どものときと大人になつてからとは関係がないといふ前提に立つて、子どもから大人への成長を考えはじめたい。

人はだれでも過去の自分のままで現在を生きるのではない。過去の自分のやり方を意識して変えて、現在は新たに生きようとしている。大きくなつた子どもと再び会い、交わることになった場合、以前のこと念頭において付き合うのではない。きょう新たに出会い、小さな表現に目をとめて交わり、いま一緒に快く過ごすことをつとめる。



## 月に一日のつきあい

私はこの頃、愛育養護学校の子どもとつきあうのは、月に一度である。長年、私が毎日つきあってきた子どもたちなので、最初の頃は、私が行くと子どもたちがわらわらと寄ってきた。この頃はそれほどではない。毎日頼りにしている先生たちにいろいろと頼んでいる。私は客人である。わずか一年の間でも、毎日頼りにできる人とそうでない人との間にはこういう違いが生じる。客人にはそれなりのメリットもある。少し離れた立場から子どもを見られるので、子どもの変化にすぐに気付く。

U子は、私を見ると、「うえしたいく」と言う。この子は私に抱かれて階段を上るのを「うえした」といったのだが、ぐんと大きくなつた子どもを私はもはや抱くことができない。そういう自分を意識しながら、私は「手をつけないで、いこう」と言うと、「おててつないで」の歌をうたいながら自分の足で階段を上り、二階の廊下を歩いて行く。「しづかねー」と小声で言い（これは以前からの継続の、私とU子との間のひそやかなやりとりである）、一緒に「里の秋」をうたう。二階の部屋で何かをしている間に、U子はひとりで部屋を出て行き、歩いて階段を降りる。足を交互に出して降り、最下段は両足で跳んで降りる。足が弱くて歩かなかつた子どもである。私が会わ



なかつた日々、保育者にはいろいろと苦心があつたと思うが、細かいことは分からない。わずかの間にも私には分からぬことが一杯起つてゐる。しかし、私が何年も一緒にこの子と過ごしてきただ日々が、これでよかつたのだと確信できる。

### 青年期に至つた人たち

Y先生の造形教室には、愛育養護学校を十年ほど前に卒業して、地域の養護学校の高等部を終え、福祉作業所に通つてゐる青年たちが月に一度集まる。愛育養護学校で美術を担当しているY先生の教室では、子どものときと同じように、それぞれが思うように描いたり作つたり作つたりしている。若い芸術家たちが、先生というのではなくに、一緒に作るのを楽しんでゐる。私はこの数年とくに忙しくて、殆ど参加したことがない。先日久しぶりに寄せてもらつて面白かった。私がいたからといって、特にどうということはない。青年期にあたるこの人たちは老人よりも、若い人を相手にするほうがはるかに楽しい。かつて親しかつた大人との信頼関係は心の底に継続していく。それぞれに自分の道を切り開いて青年期に至つた子どもたちは、同世代の仲間との交わりを求めてゐる。

J夫は、この日、青や黄の色透明紙に人の絵をかいていた。手を描くスペースがな



くなり、もう一枚紙を足してもらつた。こうして四枚の紙をつぎつぎに継ぎ足すことによつて、描いた手足が伸びた。J夫はこれまで顔だけしか描かないことが多く、手足をひろげて描いたのははじめてだつた。そして周囲に絵の具で四角く枠を描いた。以前は枠を最初に描き、それにすれすれに何かを描いていた。J夫にとっては枠が存在の基準となつていたのだと思う。この日は、枠にすれすれに描くというよりも、手足を伸ばした人間をまず描いて、それを枠にいれたのである。J夫の内面にも変化があつたのだろう（幼児の教育九十五巻七号一九九六年参照）。

J夫は、造形教室に来るとまず着替えて丁寧に洋服を畳み、それからうがいをし、台所で冷蔵庫をあけ、テレビをつけて造形教室開始時間の二時を待つ。母親に電話をかける。ここまでとはいつも同じであり、これが狂うこととは承知できない。日常生活の手順が定まっているというのも小さいときと同じである。だからといって他のことも同様にきまつた順序にせねばならないと考えたら間違いである。芸術は、人の心から出る小さな動きを創造性と認め、自らの意志でそれを実現できる環境から生まれる。J夫は、おやつのとき、みかんを食べた。あとで気がついたのだが、むいたみかんの皮が五片に裂けており、その一片に種が集められて並んでいて、五片の中央が臍のように切り抜いてある。見事に手をひろげた人の形である。いまJ夫の心には人間が



大きな位置を占めているのだろう。

N男は、造形教室にきている中学生の女の子の髪をさわって、キーと大声をあげ、他の子にうるさいと言っていた。この子が小さいときの記録には、学校に来る途中、広尾のバス停でキーと大声をあげて母親が困ったと記してある。大声をあげるという点は同じである。今日のN男の大声は、N男がはじめてこの中学生の女の子の女性としての成長に気付いたことに對する反応だろう。造形教室に迎えにきた母親にことを言うと、あのときは自分が未熟だったからといった。あのときにもN男はバストでだれか素敵な女性に出会ったのかもしれない。両方の時期を知つてみると、あのときの大声にも何か意味があつたのだろうと推測がつく。それを奇声と呼んだら間違える。

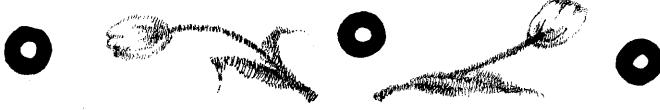
## 二十年を隔てた交わり

現在、私が毎週行つてゐる御殿場コロニーで、二十年前に私が付き合つたことのあるH子さんと再び会うことになった。彼女は最初、八人ほどの人と一緒の寮に住んでいたが、あるときから、寮の職員の髪を引張り、噛みつき、激しく頭突きをした。私が体育館で音楽の活動をするときも、私に飛びかかって激しい行動をするので、私



H子さんは、四歳と五歳のときに母子愛育家庭指導グループに週二日通っていた。私はその子の激しい水遊びと付き合ったことは覚えているが、それ以上のことは明瞭な記憶になかった。コロニーで頭突きや噛みつきの激しかった頃、私は多忙を極めていて、二十年前の記録をひもとく時間もなかつた。最近になって、記録を取り出して見た。それは丁度私が、子どもの見方を一八〇度かえて、行動を表現として見るようになった最初の頃であった。

その後二十年間私はH子さんと会うこともなかつたが、小学校、中学校もしばしば転校し、どこかの施設に入ったことを聞いていた。そこでどういう生活をしたのかは、私は敢えて尋ねようとは思わない。ただ、私が出会ったときの状況は前述のようであつた。私共はいろいろと考え、相談し、H子さんは大勢の人が居住する施設の生活が嫌なのだろうと考えた。そして近隣でグループホームを開いている方のホームに移り住み、昼間の活動だけコロニーに通うようにした。施設の外に住むことが分かつ



たとき、H子さんの激しい行動はほとんど全くなくなつた。一、二週間のことだつた。ノーマリゼーションで言われているように、施設からホームに環境が変化するこどがこんなにもたいせつなことがよく分かつた。

毎日子どもの保育をしているときには、大人と子どもとは相互に一緒に変化していく。月に一度のときは、大人と子どもとは違う場で成長していく、一日だけを共有している。年に一度出会うときは、もっとそうである。二十年たつときは、自分が知っていたその子とは違う人と付き合うと考えた方がいいだろう。大人も二十年前とは違う境遇にある違う自分になっている。いまこの人が直面している状況、いま関心をもつている事柄を理解して応答するのでなければ、そこを一緒に成長する場とすることはできないだろう。



❀❀❀ ある日の育児日記から ❀❀❀

(77)

佐藤 和代

有が赤ちゃんのときからお世話になっている、保育園のK先生。年中組でも持ち上がりで担任になり、K先生が好きな有は大喜びです。でもある日、有は、家に帰つてくるなりしみじみした口調で言うのです。「K先生ね、結婚するんだって」。私が単純にはしゃいで、「わー、それはよかつたわねー」と言うと、有はちょっとすねたように「でもね、ゆうとじや、ないんだよ」…一瞬、絶句した私。う、ここで笑っちゃいけない。親のデリカシーが試される時だわ。適切な言葉を探したけれどみづからず、「そ、かあ、残念だったねー」なんて言つてしまつた。意味なかつたから、でもね、ゆうとじや、ないんだよ」として仕事していくなら、幸せだろうな。

有のクラスメートのお母さんにそんな話をしたら、そのお母さんは言いました。「うちの子がね、『K先生、また恋人とけんかしたんだって、もう婚約、解消しちゃうかもよ』なんて言うの誰に似たんだ!」「コイツば…」

よ。子どものいるところでけんかの話なんかすると、全部親につづぬけだつてわかつてゐるのかな」。

あはは、K先生、お氣をつけくださいね。どうぞお

ねー」なんて言つてしまつた。意味なかつたから、でもね、ゆうとじや、ないんだよ」として仕事していくなら、幸せだろうな。

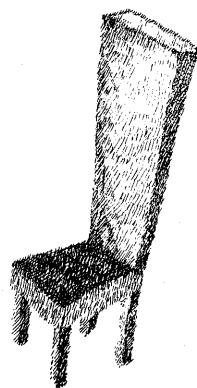
それにしても、保母さんつていう仕事、いいなあ。こんなかわいいおむこさん志願者にかこまれて仕事をいたら、幸せだろうな。

*3たまには  
たまな...  
おかえり?  
まねっこする有です。  
圭が信頼していると  
まねっこする有です。*

特集〈慣れる〉

焦らず カつくりと！

内村真奈美



泣かない子たち

「最近の子は泣かないね」「泣く子が少なくなつたよね」「新年度ではないみたい」「以前はもっと慌ただしかったよね」「本当にこれでいいのかな」

近年、私の保育園でこのような会話が交わされるようになりました。

以前は、泣いたり、たとえ泣かなくても「行きたくない」「嫌だ」と身体全体で抵抗する子どもや、門の側にずっと立っている子どもの姿が多く見られていました。自分ではそういう子どもの姿

な

が当たり前と思っています。

しかし、保育園という家庭とは全く違った環境の中に初めて入ってきたのに、泣いたり戸惑いを見せたりしないで、抵抗なく過ごしている子どもたちの姿が多く見られるようになりました。泣かずに保育者の手を煩わせないでいる子どもの姿を見て“泣かないから大丈夫”＝“もう慣れた”と勘違いをしていることが多いのではないか。

保護者の中にはこの傾向が多く見られます。入園までは、「うちの子は大丈夫でしょうか」「慣れてくれるでしょうか」と、心配でたまらない様子。しかし、入園して二、三日過ぎると、“泣かない”からうちの子は大丈夫と思い込み、「明日から、夕方までお願ひします」と、連れてきます。保育者の「もう少し待って」「もう少し様子を見たほうがよいのでは」と思う気持ちと、保護者

の「泣かないから大丈夫」と思う気持ちとの食い違いも度々です。

子どもはとくに、入園前から「保育園では良い子にしてなさい」とかなりプレッシャーを受けている子が増えたのか、表情が乏しく、自己発揮する子が減ってきているように思います。そこで私が出会ったのが、慣れたように見えていたA君です。

### “慣れたように見えていた” A君

五歳新入園児のA君は、入園当初から、保育者を困らせることもなく、クラスの中にもスムーズに入っていました。保育者に甘えることもなく、何をさせても上手にできるので、一つの間にクラスのリーダー的存在になり、皆からも頼られ、保育者もまた、頼もしく思っていました。運動会で竹馬に乗れたときや、あけびが沢山ある散歩

コースを教えてくれたときなど、注目を浴びることで自分をアピールしていたので“慣れた”と思つていました。

十二月のある寒い日、登園時、私の手が冷たかったので、A君の手を握ると「先生の手冷たいね、僕が温めてあげようか」と、自分から言つてきました。それから、毎日のように手を握つてくれたのです。これがきっかけで、すっかり甘えてくるようになり、自分を出してくれるようになりました。自分が出せるようになったときには、A君が本当に“慣れてきた”と実感を持つて思えたのです。

### ゆっくり慣れたR君

園に慣れるということ、入園当初のことだけに限定してしまいがちですが、長期間をかけて慣れる子もいます。

四歳新入園児R君、四月当初から自分の部屋にいっていました。入園前から仲のよかつた三歳児（女児）と一緒に活動し、三歳児のクラスで過すことが多く、自分のクラスに入つてくることはまれでした。三歳児の担任と連携を取りながら、この間、R君との信頼関係を作つていきました。大分落ち着いてきて、三歳児の部屋で休息ができるようになったこともあり、五月後半、休息のとき自分の部屋に誘つてみました。「今日は寝なくていいから、皆の寝るのを見てみようか」と、部屋の隅に毛布を敷いて、他の子どもたちの寝姿を見つめました。翌日から、その毛布がR君にとって部屋にいることへの拠り処となりました。数日すると自分から毛布に横になり、またクラスの子たちも「ここは、Rくんの」と言つて、毛布を敷いてくれるようにもなりました。

特集 〈慣れる〉

六月に入ると、自分で毛布を持っていき友だちの側で寝られるようになりました。隣の男の子と話したり、冗談を言ったりしているうちに仲良くなり、昼食やおやつも一緒に座って、食べられるようになつたりと、休息をきつかけに慣れていったのです。

R君のように、ゆっくりと時間をかけて慣れていった事例は沢山あります。実際は、「こんなに、一人に時間を採つていられない」ということになりがちです。そこで、必要になつてくるのが、保育者同士の連携です。「自分のクラスの子ではないから、私は関係ない」ということにならないように、園全体で受け止めしていくように心がけています。

子どもを追いかけてないで

「泣かなくなつたから大丈夫」 「もう、二週間も

ある子は数日で慣れていきます。ある子は一か月かかる場合もあります。もしかすると、半年、一年かかるって「慣れた」と思える子もいるかもしません。

で表現しきれないままに園生活を過ごしていける状態になりかねません。“慣れる”ということは、慣らされることではありません。子どもが主体とならない限り“慣れる”ということにはならないと思います。

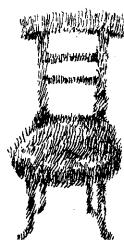
経つたから慣れただろう」と「慣れる」ということに、「これくらい経つたらいいだろう」という固定観念で、保育者が一方的に枠決めをしてはいけません。子どもが時間の枠にはめられ、時間通りに追い立てられてしまったら、慣れる過程を身体

私は、学童クラブに勤務しています。学童クラブは、両親共働き等の理由で、学校から下校して

も家庭に誰もいない子どもたちが、放課後を過ごす施設です。学童クラブの子どもたちは、学校が

# 一年生が慣れるまで

橋本由美



な表情をしていたか」など、そこにいる、子どもたちの表情が大切になつてくるのではないでしょ  
うか。

と」というゆとりを持って、保育したいと思つて  
います。

(安良保育園)

終わるとランドセルを背負つてここに来ます。そして遊んだり、おやつを食べたりして放課後を過ごし、五時になると自宅へと帰つて行きます。私の勤務している学童クラブは、一年生から三年生が対象です。一年生で入室した子は、三年間、放課後をここで過ごし、三年生の三月には卒室。そして入れ替わつて、四月からはまた新しい一年生が入室してきます。このピッカピカの一年生たちが学童クラブに慣れるまでが、一年間の中で一番大変で、大切な期間です（当の一年生にとっても、上級生にとっても、私たち指導員にとっても）。

入学してから二週間位は、一年生は方向別集団下校です。帰宅方向別にキリンコースだのパンダコースだのに分かれ、学校の先生に送られて下校して来ます。学童クラブに登室して来る子は飛行機コースで（何故か動物の名前でない）、ひとつ一つの集団になつて下校して来ます。顔と名前がまだ

一致しないので、とりあえず人数を数えます。一人、二人、三人、……二十五人。あーっ、一人足りない！必ず足りないので。出席簿を見ながら一人一人を確認し、誰がいないのかを確かめ、学校に連絡をとつて捜します。やつとみつけて学童クラブまで連れて来れば一安心。どうして間違つちゃつたのかを聞いてみると、自宅の方へ行った、仲良しの子と同じ方へ行きたくなつた、なんとなく先生について行つてしまつたなどなど。理由を聞いてると、子どもの発想の面白さに感動してしまうのですが、感動ばかりもしていられません。間違えないで学童クラブに来てくれるようには、何度も繰り返し話します。そして、全員がびたり！と学童クラブに来られるようになると、学童クラブに慣れる第一歩はクリアです。その頃には、私たち指導員も、顔と名前が一致するようになつています。

学童クラブでは、子どもたちが登室して来る時の挨拶は「ただいま」です。私たちは、「お帰りなさい」と迎えます。二、三年生は元気よく「ただいま」と登室して来るので、新入生たちはこの挨拶に違和感を感じるようです。一年生たちは初めて登室して来ると、「お帰りなさい」と迎える私たちに、「こんにちはー」「お邪魔しまーす」と挨拶して玄関を入って来ます。「学

童クラブでは、ただいまって挨拶して入って来るんだよ」と話すと、「なんでー」「こはお家じやないじやん」「変なのー」と抵抗します。「学童クラブは、皆のお家の替わりなの。五時まではここがお家なんだから、ただいまでいいんです」と説明しても、誰も「そうか！」なんて言ってくれません。変だよとぶーぶー言います。でも、二、三年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが「ただいながら本を読んでもよし、トランプ、将棋、オセ

まー」と登室して来ると、とりあえず真似っこして、「ただいま」と登室して来るようになります。でも、この「ただいま」はまだ本当の「ただいま」ではありません。本当の「ただいま」になるためにはもう少し時間が必要です。本当の「ただいま」が自然にできるようになつた時が学童クラブに慣れた時だと、私は思っています。

学童クラブの生活のほとんどは自由遊びです（そうでない所もあるようですが、私の知っている学童クラブは大抵自由遊びが中心です）。他の子や近所の迷惑にならないように決められた約束はありますが、それほど沢山はありません。すぐには見えられることばかりです。その約束を破らなければ何をしてもいいのです。室内でゴロゴロし

口、カルタをするのもよし、外で缶けり、ドロケイ、ドッジボールなどなどするもよし。ちゃんと宿題をすませるよい子もいます。しかし、入室したばかりの一年生は、何がどこにあるかがまだ覚えられないし、友達関係もできていないので、どうやって時を過ごすべきか（四月中は十時、十一時という早い下校時刻なので溜息ができる程長い時間があります）しばらくはとても困り不安になります。そこで、私たちに何でも聞きに来ます。「先生、折り紙していいですか」「先生、本読んでいいですか」「縄飛びしてもいいですか」「トランプどこ?」「おしつこ行っていいですか」。同じ子が同じことを何度も何度も、もう判つている筈なのに聞きに来たりします。「さつきも言ったでしょ」「何度も同じこと聞かないで下さい」は禁句です。誰が何を聞いてきても初めて聞かれた

時と同じように返事をします。絶対に怒っちゃいけません（まだまだ修行の足りない私は、時々イラついてしまうのですが）。ずっと私たちの側にいて、「何やつてるの?」「それ、何なの?」「どこへ行くの?」トイレにもついて来て、「先生まだー。大なの小なの」と呼びたてる子もいます。「我慢、我慢、怒らない怒らない」は、この時期の指導員の合言葉です。

上級生が登室してくると、上級生にもくついて回ったり、質問責めにしたりします。例年、感心させられるのですが、上級生は私たち以上にこういう一年生によく付き合ってくれます。色々な遊びを実に根気よく教えてくれます。大人が聞いているとそんな説明でわかるのかしらと思うのですが（例えば、大人なら「大きい」の反対は「小さい」と言いますが、「大きくなない」という説明

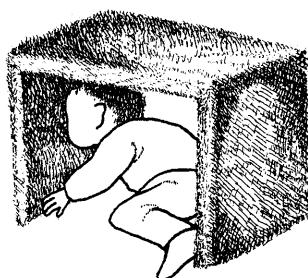
のしかたをしています)、子ども同士の独特のコミュニケーションで、ドロケイや大縄飛びやウノなどの複雑なルールをちゃんと伝えていってくれます。子どもの教え方はとても面白く、私たちも教えられることが沢山あります。

こうしているうちに友達関係ができ、物の場所も覚え、気のあう上級生もみつけて、学童クラブで遊ぶことが楽しくなってきます。夏休み前の七月頃には、一年生はほぼこの状態になります。勿論、「ただいま」の挨拶は自然にできるようになります。学童クラブが帰つてくる場所になるんですね。

こうして、一年生は学童クラブに慣れます。クラブ便りにも、「一年生もすっかりクラブに慣れ云々」と書くことができます。そして、夏休みにむかって新しい次のステージが始まるのです。激しいケンカや、おもちゃをあげたのあげないの、

集団脱走事件など、慣れてきたからこそ起きる色々な出来事に、今度は対応していくなくてはならないのです。

(江戸川区立船堀第三学童クラブ)



# “慣れる”その前に

森 兼千枝子

「駄目じゃあないの、浮輪につかまつてばかりい  
ては、習ったのでしょおっ」

甲高い声に驚いてプールサイドで子どもを見て

いるお母さんらしき女性、怒られたのはわたしの  
目の前で水色の浮輪を両腕でしつかり抱え込んで  
いる六、七歳の男の子、わたしと目のあつた瞬間

はにかむようにニコッと笑った。その笑顔につら  
れてか浮輪をつかんでぐいぐい引っ張つてプール  
の中程までいった、あの声から逃げるようにな。

「僕、スイミングスクールに行つてるの？」

「うん。でも好きじゃあないんだ」

「そう、おばちゃんも行つているの、一年ぐらい

になるかな。……どうして嫌いなの

「だって水の中、怖いんだもん」

「今、水の中にいるじゃないの、足だって届かない深さだよ。まあいいや、遊ぼう」。二人はプールサイドに近づかないように真夏の太陽を頭上に浴びながらはしやぎまわった。遊び疲れた二人はいつの間にかプールの壁ぎわの浅いところにきていた。浮輪をはずしてジャンケン遊びに興じた。

「水の中でやつてみよう」

「うん」

「顔も水の中だよ」。なかなか沈めないので、手を繋いだ。それまでは勝つたり負けたりだったのが水中だと私が勝つてばかりいる。それもその筈、相手の出したグーを見てチョキだった私がふざけてパーに変えて相手にはわからないのです。べソかいて泣き出しそうな顔をする。

「水の中でわたしの手が見える?..」

「見えない。暗いもん、やめた」

「一寸まつてよ。どうして暗いの、目つぶつているの」「うん」「じゃあ、もう一度」。水中でよく見ると目をかたく閉じているのです。

「両手を繋いでもぐろう、そして私のお顔を見てね」。一・二・三と思い切り沈んだら二人ともプールの底にお尻をぶつけました。おもわず水中で笑いました。

「おばちゃんが見ええたよ」

浮き上がった二人は大声で笑いました。もう一度、もう一度、と遊び興じたのです。

「あっちへいこう」と向こう側へ泳ぎだしたのは、浮輪をもたない男の子でした。あわてて、水色の浮輪をプールサイドに放りあげ、私も泳ぎました。いつたり、きたり、何度も、何度も泳ぎました。ずいぶん昔の事ですが、私には忘れられな

い夏のある日の旅先での思い出です。

その頃、私は定年五十五歳の節目にあたつて越し方を振り返る日々が多かったと思います。その中でスポーツに関する事と、運動嫌いは生まれつき運動神経の鈍さによるものと決めつけていたことに気づいたのです。ゴルフも駄目、テニスも駄目、卓球さえも駄目、運動らしき事といえば、山歩きぐらいのもの、子どものころ運動会が大嫌い、体操の時間になると頭が痛くなったり腹痛がしたり何とか理由をつけて見学に回ったものです。

そんな私が、放課後、ことに夏休みなど一日中

遊び惚けた故郷の小さな川を思い出したのです。

「水泳なら出来るかもしない」

「スイミングクラブに入ったのが一年後の五十六歳のときです。それでも、何度もプールの観覧席から眺めては逡巡したものでした。

スイミングは週一回のスクールからはじめまし

た。会社の仕事は引き続いてやっておりました。

その帰りの道のプールを選びました。初めのうちは興味本位、そのうち、義務感みたいなものにかられてスクールに通いました。スイミングスクールの日になると水に入りたくなっている自分の体に気付きました。でも飽きもきました。飽きたではなくて嫌になつたのかもしれません。義務感みたいなもの、あるいは、お金を払っているという欲からか、スクールに通うことには慣れましたが、嫌になりました。教えてくださることが出来ないのだから……。

そのころ、あの男の子に会つたのです。無心に遊びながら、でも、勇気を出して、水の中で言われるままに目を開けたのだと思います。

私の出来なかつたのは息継ぎです。水に慣れていたのでキックの仕方を覚え、ブルの仕方、水のかきかたを覚えた私は、二十五メートルのプールを

呼吸もしないで泳いでいたのです。だから苦しいのです。慣れるどころではありませんでした。  
無心になろう、無心になろう、そして勇気を持つとう、水着に着替えながら呪文のように唱えたものです。教えられるまま無心になつて泳ぎました。呼吸の仕方に慣れたのは言うまでもあります。

いい、そのなかで体に慣れてくれるものがあればいい、それが私の泳ぎなのです。水泳を初めて一年目になりました。まだまだ習い覚えなければならぬことが尽きないほどあります。それなのに惰性で泳いでいるときもあります。「なぜ泳ぐの」、自分に問い合わせてみます。「わからない」。慣れで泳いでいるのでしょうか。そんな時、もし私が子どもだったら何と応えるかしら、そう、理屈はいらないのです。また、ある時は、教えてくださる泳ぎのテクニックが出来なくて情けなくなりたり、スピードがでなくてタイムがおそらく落ち込んだりします。私は忘れていいのです。無心になること、勇気を持つこと、そこが出発点だからです。無心、無心、勇気、勇気はこれからも続くでしょう。そして飽きたとき、嫌になったとき、それは無心になることを忘れたとき、勇気を持つ気力がなくなつた時だと思います。僅かでも

「おばちゃんにご挨拶は」「やさしいおかあさんの声。「おはよう」「さいます」「おやよう」「さいます」「おはよう。いつてらっしゃい」朝の出掛け

によく合ふ近所の母子連れです。無心に交わす大人と子どもの挨拶です。これが小学生、中学生と成長したころは、どうなつているでしょう。さらに、成人となつてからも「挨拶もできない奴だ」と嫌われることもあります。でも、幼いころはできていた筈です。成長に連れて自我の芽生え、羞恥心、疑義などが妨げになつてゐるのではないか。こんなとき無心になればいいなあ、無心になることに勇気を持ってばいいなあと、私は思います。

「華の会」は働く女性の水泳教室です。社会の第一線で活躍している方々が、「もつとキックして」「腕を伸ばして」。コーチの声に一生懸命です。水着姿になるのさえためらいがちだったのに水に浮くこととも潜ることにも慣れて、喜々として泳いでいるのです。勇気を持つことも、無心になることも「じぶん自然なのです。初級、中級、上

級と進むにつれて新しいテクニックを体に慣れさせなければならない。途中から仲間入りした私は少しばかり泳げるからといって慢心していたわけではないけれども、見習うべきことの大しさを改めて考えさせられました。子ども心にかえつて無心にコーチの言われるまま手を動かし足を動かし泳ぐことにしています。苦しいときもあるけれども、楽しいこともある筈、いつの日かきっと素晴らしいスマーナになれるだろう、そんな夢をもつて楽しく泳いでいます。

しょうか。無心に受け入れ、実行したことから当たり前の事として身につくのではないでしょう。もちろん「悪いことへの慣れ」にも通ずるものがあります。それをどのようにして与え、育て

成長させれば良いのか、還暦をとうに過ぎた私が苦手「スマミング」をとおして深く考えるものがあることを痛感しております。

(華の会)

## 慣れるには

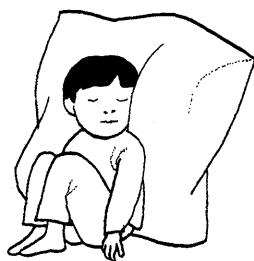
## 考えることと時間が必要

鈴木 洋

内科の先生と話すとよくこんな事を言われます。「子どもは苦手だ、話はうまくできないし。診察すれば泣いて、まったくわからない」。それに対しほくは「大人は診察中、自分の都合のいいことは言うが、そうでないときは嘘を付くこともあるから難しい」と答えます。立場が違うと、苦手などころも違うのです。

内科の先生は子どもが泣くことが苦手のようですが、小児科医は対象が赤ちゃんです。泣かない赤ちゃんはいません。普通、大人は他人の前では感情を抑えます。泣くことは特別の時です。子どもはいろんな理由で泣きます。泣いている声で僕たち小児科医はいろいろと考えます。おなかがすいているのか、おむつが濡れているのか、どこか痛いのか、こわがっているのか、寂しいのかなどです。

これらのこととは多くの赤ちゃんとつきあつてい



ればだんだんとわかってきます。医者であるぼくは泣き声を病気を中心に考えます。しかし子どもとつきあっている保母さんはたぶん子どもの気持ちを中心を考えるのではないでしょうか。お母さんは生まれたての赤ちゃんの泣き声が何で泣いているのか初めはわかりません。しかし、おっぱいや、ミルクを与えると泣き止めば今の泣き声はおなかがすいていたのだなということがわかりま

す。おっぱいや、ミルクは一日に何回も与えます。何回も泣けばそれがおなかのすいたときの泣き声であることは自然にわかつてきます。抱いて泣き止めば赤ちゃんは抱いてもらいたいんだなということがわかつてきます。おなかがすいた、おむつが濡れた、なにかおもしろくないことがあつたなど日常的なことで泣けばお母さんはその理由がだんだんとわかつてきます。

しかし病的なことはそうは経験しないでお母さんも迷うことがあります。小児科医は病的な泣き声がどんなものかを判別するのが仕事なのでこの判断能力はだんだんと育つてきます。慣れていると言えばそれまでですが、慣れるまでには時間となせと考える経験が繰り返されます。なにも考えないで、赤ちゃんの泣き声を聞いていたらたぶんなぜ泣いているかわからないと思います。

内科の先生は赤ちゃんの泣き声を聞いてもただ

うるさいと思うだけだから苦手になるのではないでしょか。僕たち小児科医は赤ちゃんの泣き声から病気を診る責任があるからはじめに対応するのです。お母さんは赤ちゃんを育てる責任があるのでから泣き声にきちんと対応できるようになるのでしょうか。

「慣れる」は広辞苑には「物事を絶えず触れることによって、それが平常と感じられるようになる意」たびたび経験して常の事となる。また、たびたび行ってそのことに熟達する」と書いてあります。何回も経験しそのことを理解して初めて慣れていよいよ慣れる状態になります。

ぼくは二十年以上小児科医をしています。この二十年の意味は何となく二十年たつたという意味ではありません。いろんな病気を診、勉強し、親と一緒に悲しみ、喜んだことのある二十年です。病気のこと以外のことでも医者として考えた二十年

なのです。そして初めて「二十年の経験のある小児科医です」といろんな人に言えるのです。子どももの扱いになれていると言つてもそれなりの時間と経験が必要なのです。

ぼくには小児科医としての二十年の他に、日本人としての四十七年、父親としての十五年、結婚しての十七年などいろんな自分があります。

日本人と言えるのは両親が日本人だけではあります。日本語を話すことだけでもありません。日本の文化、歴史を学び、経験しているから日本人といえるのです。日本で生活している日本人といふことをほんと意識しません。しかし海外にでると自分が日本人であることをいやがうえでも意識させられます。当たり前のことで状況が違えば当たり前でなくなります。海外にでると、お金が違います。言葉が違います。電車の乗り方などいろんな事が違います。そして慣れるま

で時間がかかります。自分が慣れて当たり前と思つていたことがそうではないことに気がつきます。

「慣れ」は決して悪いわけではありませんが、当たり前が当たり前でないことも考える必要があります。僕たち医者は主に病気を診ています。ごくありふれた病気から、珍しい病気まで診ます。外来で、お母さんから「風邪ですか」と聞かれ、「はい、風邪です」と答えればそれでお互い納得して終わりです。しかし、別の病気を言えばお母さんとぼくの間には緊張が走ります。その緊張をやわらげるため、いろいろと病気の説明をします。お母さんが納得すれば緊張は徐々に消えていきます。しかし、病気の中には元々よくわかつてないものもあります。なかなか緊張がなくならず不安だけが残ることもあります。

同じようなことは保育園や、幼稚園などでもあ



るのではないでしょか。普通、保育園や、幼稚園は健康な子どもがいる場だと思われています。その中に、自閉症のようなコミュニケーションがうまくとれない子どもが入つてくると園は困惑するようです。時々、このような親から「うちの子を園でどのような対応したらいいか医者に意見書を書いてほしい」といってくることがあります。

一般的な子どもと違つているから病名が付いていますが、医学的には十分わかつていません。病気の説明をしてもらかなが理解してもらえません。僕は「他の子どもと同じように対応すればいいし、困ったときにはその場の先生の判断でいいです」と答えています。赤ちゃんを育てるお母さんのようにつきあいながら悩み考えてゆけば不安などなくなるのではないかでしょか。

初めは知らないと不安を感じると思いますが、考え、時間がたつと慣れてきて不安は徐々になく

なります。しかし慣れっぱなしになると変化に気が付かないことがあります。当たり前に思つていることに少し変化があつたとき、「あれ」と思うことは非常に大切ではないでしょうか。「あれ」と思わなければそれは慣れではなく、なにも考えてないことだと思います。

(鈴木こじこもクリニック)



## 一年間を振り返って

小島 由希

「少しは慣れたでしょ」「表情に余裕が出てきたね」

そう言われて「少しは先生の顔になってきたかな」と思いながら鏡を見る。

保育者になって二年目、四月からは三年目になる。とはいっても、四歳から五歳へは持ち上がりだつたため、三年目からが気持ちの中での二年目ということになりそうだ。

この二年、無我夢中という言葉がまさにぴったりの生活だったようと思う。走り回る子どもを前にオロオロと立ちつくした入園式。時間に追われるようにならぬか降園させ、保育室に座りこんでしまってうになる日々が続いた一学期。「子どもたちが話を聞いてくれない」と自分に自信をなくし、保育中に泣いてしまったこと。手を真っ黒にしながら土手登りに挑戦し、「先生、子どもみたいだね

え」と言われたこと。そして、子どもとの生活も二年目を迎える、「こんなことも出来るんだ」「ずいぶん頬つきがしっかりしてきたな」と、成長ぶりに驚いたり喜んだりすることが多くなってきた年長組……。

遊びの様子や子どもの育ちなどを書き込んだ記録の端には、そんな戸惑いや不安、迷いなどが走り書きでメモしてあり、この二年間で経験したいいろいろな思いを読み取ることができる。

「今日もまたグチャグチャになってしまった。どうしてだろう」「幼稚園の先生にむいていないのかな」「自分の指導力の無さに情けなくて涙が出てしまつた」「今日は少し落ち着いて子どもとかかわることが出来た。楽しかった」反省や後悔ばかりが目立つ内容だが、その日その日の出来事、子どもの様子に喜んだりがっかりしたり悩んだりしたことを素直な気持ちで思いつくままに書

いている。保育で自信をなくしたとき、迷つたとき、ふと思いつ出してこのメモ書きを読むと、「こんなときもあつたな」「今だつたらこうするかな」と、その時の自分の奮闘ぶりが思い出されて（本質的な問題は解決しないのだけれども）元気が湧いてきたり、初めの頃の新鮮な気持ちを改めて思い出すことができるような気がするのである。

このメモを読み返してみると、今まで経験してきた出来事の一つ一つ、例えば、遠足や運動会などの行事や毎日の遊び、子どものつぶやきや仕草などの日常のあらゆることが、知らないうちに自分が経験としてため込まれ、それが少しずつ気持ちは余裕を生み出していくことに気づく。そして、その気持ちは余裕に比例して、「ああ、そうだったのか」「○○ちゃんには、こんな一面もあつたんだ」という新しい発見やいろいろな見方をする機会が増えてきたことも確かのこととして

感じられる。これも、余裕をもつてかかわることができるようになってきた分、子どものことをより深くみつめ、考えられるようになってきたからなのだと思う。

気持ちに余裕をもてるようになり、その人のもつている力が發揮されるようになること、これが「慣れる」ということではないだろうか。

しかし、保育の中では、「慣れ」の気持ちが時あまり好ましくないところで表われてしまうこともないとはいえない。以前にも経験したことのある場面、子どもの遊び、様子に、つい「またいふもの、だろう」「こうなるだろう」という勝手な思い込みや見通しで言葉かけや対応をしてしまって、何となく不満そうな、納得しないような子どもたちの言葉や態度にハッときさせられることがある。そんな時、わけも分からずただ一生懸命に思つていることを聞く以外に方法がないと思つていた頃

の方が子どもの言葉に耳を傾けていたかもしだい、一人一人の子どもの気持ちを大事にすることに一生懸命だったかもしれない、恥ずかしさでいっぱいになる。

時に「不慣れ」であることも、保育者にとって必要なことなのかもしれない。

\*

保育者になって過ごしたこの二年間のことを考えると、改めて、保育という仕事に就くことができたことを幸せに思う。子どもの言葉や行動に笑つたり喜んだりがっかりしたり、時には思いもよらない出来事に疲れなくなったりと、まさに全力投球の毎日という感じであるが、一日として同じように展開される日がないこの生活が、今楽しめて仕方がない。あと十数年もすればペテランと呼ばれるようになるのだろうが、いつまでもな

りたての頃のように新鮮な気持ちで子どもに向か

い合える保育者でいたいと思う。そして時々は記

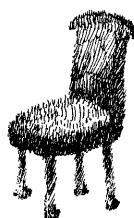
録などを読み返しながら、何をかも分からず真っ白な、でも一生懸命な気持ちをいつまでも忘れない

いようにこれからもやつていきたいと思う。

(茨城大学教育学部附属幼稚園)

## 在外子女の異文化対応の諸相

—異文化間を往還する者のストラテジー—



渋谷 真樹

グローバル化する現在、多くの人が国境を越えて行き来している。父親の転勤に同伴して海外で

生活する日本人子女が増えているのも、その一環である。在外子女と呼ばれる彼・彼女達は、ある

時点で海外に渡り、数年後に日本に帰る、というだけでなく、日々の生活の中でも、異なる文化の間を往来することを余儀なくされている。たとえば、家庭では日本人の親・きょうだいに、学校や社会ではホスト国のマジョリティ集団に多く接触して、その都度、その場に相応しい自分を表現しようとしているにちがいない。

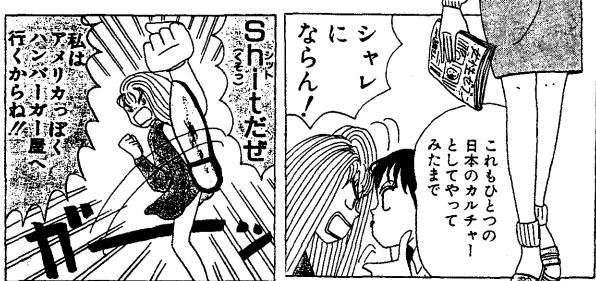
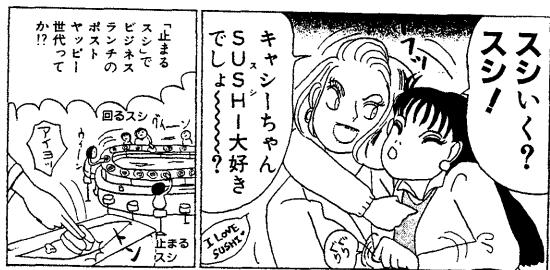
二か年に渡る英国留学中、私は、ロンドンとその近郊に学ぶティーンエイジの日本人女子生徒二十名近くに会い、話を聞く機会を持った。そして、彼女達が異文化間を移動する際に遭遇すると予想される場面をさまざまテキストを使って提示し、それを基に彼女達と話し合うことによつて、彼女達が異文化に対峙する姿勢を垣間見ようと試みた。ここでは、そのようにして集められた彼女達の会話の一部を紹介しながら、日常生活の中での自文化とホスト国との文化の対立とその切り

抜け方をみていく。

私が生徒との会話の糸口の一つとして用意したのが、中尊寺ゆづ子の『お嬢だん2』（一九九四年、双葉社）の部分である。ここに示した一場面では、文化の衝突と選択というテーマが、ニューヨークで働く二人の日本人OLの昼食をめぐる口論という形で戯画化されている。東京から派遣されたばかりの麻子は、どこにいようが「日本のOL」流を貫くマイペース型。さまざまな人種の渦巻くニューヨークでは、自分の居心地のよさを追求するのが一番とばかりに、この場面でも、サンダル履きで寿司屋に行こうとしている。対するヒロミは、滞米五年で、「現地採用のバイリンギュル」である。実力主義のアメリカ文化に惚れ込んで、ファッショնも食べ物もアメリカ式にこだわっている。ここでは、スシは日本文化をハンバーガーはアメリカ文化を表象して、ニューヨー

クに住む日本人女性  
の文化的アイデン  
ティティを明かす踏  
絵ともいうべき役割  
を担っている。

さて、私の出会つ  
た女子生徒達は、こ  
の漫画からさまざま  
な読みを紡ぎ出して  
くれた。「アメリカ  
にいたらアメリカ文  
化を学びたい。そ  
りやあ、私も、日本食に行く時もいっぱいある  
し、やっぱ日本人なのかなと思う時はいっぱいある。  
でも、建て前としては、アメリカ文化を学ぶ  
べきだと思う」と、ハンバーガー派のヒロミを持  
したのはエイコである。日本人学校で寮生活を



送る彼女は、イギリスとはいえ、「日本人と日本  
語しか喋らない」「日本が凝縮された」環境に自  
分はいると考へている。そして、帰国してもらつ  
とも「帰国子女」らしくないであろう自分を、  
ちょっぴり不甲斐なく感じてもいる。高学年に

なって初めて海外生活をすることになった自分には、日本人学校が最も安全な場所であったことを承知しつつも、「在外子女」経験は未知の憧れであり、それを奪った日本人学校という防壁を恨めしく思っているのだ。

逆に、「やっぱ日本人なんだし、日本のなところもなくっちゃさ」と言うのはカオル。彼女は、「アメリカを意識し過ぎてる」ヒロミに批判的である。一方で、「日本人でアメリカに住んでいるのに日本のお寿司吃るのはちょっとダサい」という見方があることも承知している。そんな彼女の最終決定要因は、「みんな」の意向である。みんなが寿司屋へ行けば寿司屋へ、ハンバーガー屋に行けばハンバーガー屋へとついていく。マイノリティである自分の立場を擁護しつつ、マジョリティへの目配りを怠らない、現地校は「あんまり面白くないけど、一応行ってる」と言う彼女だが、

「外人」として暮らす中で身に付けた処世術だろうか。

同様に、サオリも、異国にあって寿司が食べたいくと思うことを「日本人だから」と容認し、「どうしてもこっちの人になろうとは思わない」と言う。在英二年余、「もう、こっちの子に染まってきたような気がする」と言う一方で、日本に帰ればまた「すぐ適応する」だろうと言う彼女。「どちらでもなれる」という彼女の秘訣は、「みんなの話題についていこうと思つて、自分でいろいろ研究する」ことである。そのためには、「普通だったら見ないような雑誌とか見てみたり」もする。ただし、それは、無条件に相手に同調するためではない。情報の収集は、むしろ、相手の興味を知つて、それに対する自分の意見を持つためである。カオルと違い、サオリは、批判や異議申立ても「みんな」に参加する一形態であると考えてい

る。

この態度は、現地校に転校して半年のアキコの実践に共通する。アメリカで小学校を、日本で中学校を終えた後、また海外で勉強することになった彼女は、「どうすればいいかわからないとか、そういう時は周りを見たりするけれども、周りに合わせるっていうのは別に」と話す。新しい環境の中でも生きていくためには、マジョリティ集団の興味・関心やルールを学ぶことは急務である。けれども、そのために自分の意思を押し曲げることはない。素早く接点を作りながら、あえて全面的な同調はしない—これも異文化移動のひとつのお手本である。

ハンバーガー＝アメリカ、寿司＝日本という国式 자체を無化してしまったのが、現地校で絵画を学ぶノリコである。昼食の決め手は値段と栄養、という現実派の彼女は、ハンバーガーは油っこい

し、寿司は高い、だから、サンドイッチを自分で作って持つて来たらどうか、と考えた。彼女は、「日本人だから日本式にしなきゃってこともないし、アメリカにいるからアメリカ式っていうのも」「別に全然関係ないと思う」と言う。だから、彼女にとって、自分が日本人であることや海外で生活していることは、自分を説明する上で重要でない。「自分のことを伝えるための手段」は、「自分が今何をやっていて、将来何をやりたいか」だと言う彼女は、海外で活躍する若い日本人芸術家達を彷彿させた。

ノリコの考え方を突き詰めると、「私は私だからやるもので、いちいち日本人だからとか、国のために立って、国の見本みたいにそろすることは全然ないから」というミニユキの発言に突き当たるだろうか。就学前から英国で暮らす彼女は、「遺伝的には」日本人だが、故郷は自分が幼年期を過ご

した場所だと言う。考え方は自然、イギリスのそれに影響されているだろうが、だからと言つて「イギリス人として」行動することはない。私の出会った生徒の中でただ一人、私の用意したテストをpatrioticだと（英語で）明言した彼女は、「一人一人が国に動かされないで、自分の考えたことで動かされていると信じたい」と述べた。彼女はまた、「日本人」や「国際人」といった概念を、自明視することを許さなかつた。その裏にひつそりと貼り付いたナンヨナリズムの影を見逃さなかつたからであろう。

以上、漫画の一場面に繰り広げられた会話を中心に、在外子女のさまざまな異文化対応の在り方を見てきた。「慣れる」という言葉を敢えて使わなかつたのは、それが異文化間教育における「適応」というテーマを連想させ、個人のマジョリティ集団への一方的同化を要求する態度と結び付

く」とを怖れたからである。「」で私が問題にしたのは、異文化対立状況を切り抜け、できる限り快適に、自分らしくあろうとしている子ども達のさまざまな戦略である。なかには、流動的、多面的、ハイブリッドなどと形容してよさそうな発言も見られた。また、彼女達が自分を規定する際に、「遺伝」的系統、成育歴、そして国家が、異なる重要度で参照されているらしいことも窺われた。今後、追究されるべき問題である。

（お茶の水女子大学大学院）

\*本文中の女子生徒の名や所属などは、プライバシー保護のため、論旨に影響しない範囲で変更した。この場を借りて、調査に協力してくださつた生徒のみなさま、および保護者、先生、紹介者のみなさまに感謝の意を表したい。

# 氣になるところ

吉岡 晶子

「きょうね、またやつちやつた。なぜか、A子ちゃんのすることにカチンときちやうのよね」と、A子に対して思わず感情的に叱ったり、言つてもむずかしいようなことを言葉でぶつけたりしてしまい、隣りのクラスの先生にこぼすことが何回かあった。

その頃、ひとりの子が気になり始めると何とかしたいという思いから、自分の気持ちがそこに向き、

“どうしてそういうことをするの？” “またそんなごとして”などむきになつたり、そういう場面でのかわりが増えてしまいがちな自分、また、どうしてよいかわからずかかわれないでいる自分、堂々めぐりをしてしまって自分には気付いていた。A子との間ではそうならないようになつたといふが、A子の何が気になるのか今ひとつわからない。A子は私にぶ

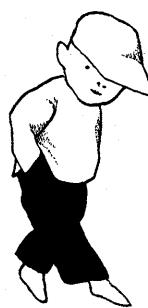
つかつてくるわけではなく、私が空回りしている気がする。私が何にこだわりモヤモヤしているのか知りたいと思った。

A子は一月生まれ。活発に良く遊び、物怖じしない元気な子。集中力、根気もあり、頼もしく思っていた。なのに、友達への物言いや行動が何かひっかかり気になり出し、「A子ちゃん、ちょっとそれはね」などと言うことが増えてきたのである。そこで、A子が友達と遊んでいる時の様子、そこで感じたこと、私とのやりとり、そこで感じたことなどをメモしてみることにした。

その一部を書いてみる。

\*

①運動会の前のこと、四歳児が園庭で玉入れをしているのを見て「先生、玉入れしてもいい?」と聞きます来る。



——他の子ども達はなんの抵抗もなくやっているのになぜ聞きに来たのだろうとひつかかるが、「池の組や林の組の先生」がいって言つたらいいんじゃない」と答える

②「手伝つてあげようか」と、B子のお家作りに加わる。加わつてからは、材料をもらひに来たりB子のしていることを見てそれに沿つて手伝つたり作つたりする。

——上手な加わり方だなあと思う。

③「何してるの?」と言ひながらお店「こやまます」とに加わる。入つてからは「こうしたら?」

「君の方がいいよ」など喜々として活躍する。

——このような場面を何回か見かける。要領良く入ってるが、どうも少し軌道にのった面白そうなところを見つけて入ろうとしているのではなくか。自分がゼロから始めるのはどういう時なのだろうか。

④割り箸の先を削って鉛筆を作ろうとしている。先

を鉛筆でぬるが思うように黒くならず、「先生、鉛筆みたいに黒くして」と言いに来る。

——黒くぬってみるが、真黒にしたいのかと思ひ、「他のものでもっと黒くぬれるものはないかしら」と言つてみたら、「だつて鉛筆だもの」とA子。「ああ、そうか、鉛筆だから鉛筆でぬりたいのね」と再び腰をすえてくる。

\*

ごく日常的な一コマである。①を書きながらいつも自分のやりたいことをしているのなぜ？ 私の指示が多いのかしらと思いつつ、そう言えばA子は「先生！」「先生！」と報告に来たり同意を求めることが多いかも知れない。A子にとつての私はどういう存在なのか気になるところ。②・③では、いつも良くなれておりエネルギーの印象があつたが、遊びの始まり方はどうだったのだろうかとあらためて気付かされた。④では、自分なりのつもりやイメージがはつきりしているA子、人と一緒に遊ん



でいて自分のつもりを主張した時にどれだけ伝わるのだろうか。はつきりとストレートに話すA子。大人の私にはわかるが友達にはうまく伝わらずにトラブルになることは起こり得る。今までにも相手への言い方がきつくて泣かせたり、主張したことで逆に反論されて泣くことなどあつたが、然もありなん、など思ったのである。

ほんの一時期のメモだつたが、それをきつかけにそれまでのA子のエピソードと照らし合わせて思ひ巡らしているうちに思ったのは、私はA子のことをよくわかつていなかつたということである。A子と私のかかわりはかなり多い。にもかかわらず、知つてゐるつもりになつていただけだった。そしてA子は自分なりの生き方で精一杯生活しているということである。頼もしいA子と思っていたが、まだまだ私を頼りにし、周囲の様子をよく見て目ざとく見つけて吸収するかと思えば、こうと思うと相手が見え

なくなる。A子はこういう子と思い込み、だんだん期待が大きくなり、他の子ならそのまま受け入れられたことも、"そんなはずでは……"と要求が高くなつてしまっていた。

そう思い始めてからは、気になるとA子そのものを気にするのではなく、素直に自分を表わしているA子のしたこと、表わしたこと、表わし方など"そのこと"に対応して、気持ちを伝え易くなっていると思っている。私の表情も違つてゐるかも知れない。この子はこういう子であるとわかつたつもりになる怖さを感じている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

今月の特集は「慣れる」です。子どもたちは、そして大人は、新しい環境をどのように今までの自分の生活に取り込んでいくのでしょうか。一緒に考えてみたいと思います。

\*

五月になると生き物がぐんぐん育つ様子に驚かされます。わが家庭先でも、メダカの卵がかえり始めました。室内の金魚鉢から、使わなくなつた衣装ケースに移して戸外に出して数年になります。その場所が適していたのか、卵はおもしろいようにかえり、衣装ケースの数もだんだんふえていきました。

はじめのころは、本の飼い方の説

明どおりに、卵だけ筆でとつたり、せっせと水を替えたりして、毎日多くの神経とエネルギーを使いましたが何匹も育ちませんでした。そこで、しだいに何もせず、自然に任せようになつていきました。卵のついた水草を別の容器に移し、よく日の当たる所においておくと、ある日小さなメダカが泳いでいました。そ

の後も一月ほどは、そつと見守るだけでした。すると、いつのまにかメダカは大きくなり、水草もふえ、タニシまでたくさんいます。どうやら、新しく水草を入れたときに茎や根についていたタニシの卵も、同じようにかえったようです。

戸外で飼つてみて始めて、メダカが住むのに適した水の中では他の生き物も育つていて、という当たり前のことに気づかされました。(A)

幼児の教育

第九十六巻 第五号  
(一九九七年五月号)

定価四六〇円 (本体四三八円)

発行 平成九年五月一日

編集兼发行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112 東京都文京区大塚二一一一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108 東京都港区三田五一一一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎ ○三一五三九五一一六六一三(営業)  
振替 ○○一九〇一一一九六四〇

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。  
本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

## 創業90周年記念出版

### 21世紀の保育を見つめて、今、保育の基本を問い合わせる

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で示されている「保育の基本」は、さまざまな形に受容され実践に移された。しかし、そこに誤解に基づく混乱はなかったか。本シリーズは、具体的な事例を通してその混乱をただし、るべき保育の姿を提案します。

# 保育の基本〈全6巻〉

- ◆第1巻 環境を通しての保育とは
- ◆第2巻 生活と遊びを通しての保育とは
- ◆第3巻 個と集団を生かす保育とは
- ◆第4巻 自由の中で規律が育つ保育とは
- ◆第5巻 発達に合わせて援助する保育とは
- ◆第6巻 総合的指導による保育とは



最新刊

編集委員 森上史朗（青山学院大学教授） 高杉自子（子どもと保育総合研究所長）  
今井和子（東京成徳短期大学助教授） 後藤節美（別府市・石垣幼稚園園長）  
田中泰行（東京都・向南幼稚園園長） 渡辺英則（横浜市・港北幼稚園副園長）

#### ●今、特に問題となっていることを各巻のテーマに

保育現場で、今特に問題となっていること、誤解されていること、混乱していること、見直されつつあることなどを取り上げ、各巻のテーマにしています。

#### ●子どもに寄り添う保育を

「子どもから」という発想を軸に、子ども理解、一人一人を見る、集団生活の意味や表面的な行動の奥にある意味を見る、ということを考えつつ、子どもに添った保育のあり方を考えていきます。

#### ●これからの保育への提案

次回に予想される教育要領の改訂をも視野に入れながら、これからの保育のるべき姿を考察し、どう実践していったら良いかを具体的に提案していきます。

---

A5判・216頁 セット定価：本体12,000円+税

---

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 創業90年・キンダーブック創刊70年記念出版

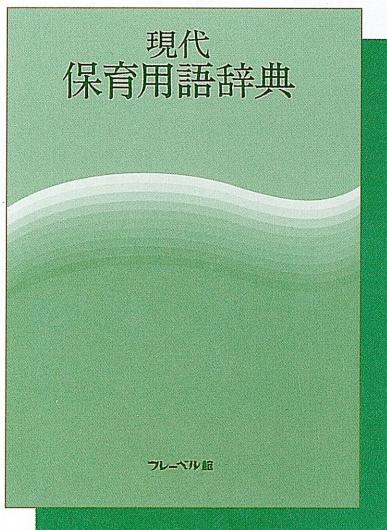
弊社は明治40年、幼児教育・保育への寄与を目指して東京・飯田橋の地に誕生しました。以来、皆様のご支援をいただきながら今年創業90年を、また、昭和2年誕生の「キンダーブック」は創刊70年を迎えることとなりました。

この創業90年・創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご利用いただければ幸いです。

基本的な保育用語約2,000語を精選、50音順に配列し、解説。

## 現代 保育用語辞典

付録：外国の保育教育40か国



保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、これから の保育のあるべき姿を分かりやすく示す 辞典。みだし語は英語訳付きで、今の保 育に直結する語釈をポイントとし、引 きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。

### 編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博  
上田礼子・大戸美也子・大場幸夫  
小林美実・中村悦子・萩原元昭

### 執筆者

保育及び隣接分野の  
最高権威者330名が参画。

A5判・592頁・定価 本体7,767円+税

好評発売中

キンダーブックの  
**フレーベル館**